
あなたが一番好きなの！！

peach-pit

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あなたが一番好きなの！！

【Nコード】

N4757D

【作者名】

peach-pit

【あらすじ】

元「私はヤクザの18代目」です！やくざ18代目の朝方雛^{あさがたひな}。海で運命の人に出会った。その人への想いは・・・？

海へLet's go!!! (前書き)

登場人物

あさがたひな

朝方雛。

あさがたくみ

雛の兄・朝方拓巳。

あさがたあやさ

雛の姉・朝方絢紗。

海へLet's go!!!

「行ってきます」

私は恐る恐るドアを開ける。

しかし、ドアの前にはすでに男達がズラッと並んでいた。

「行つてらっしゃいませ。お嬢!」

そう私の家はヤクザなのだ。

私は18代目。

まあいちお喧嘩は得意だし、キレると顔が怖いって言われるし・・・。

いちおヤクザには向いてるんだけどね。

ガチャッ

1人の男が車のドアを開けてくれる。

私はその男に一礼して車に乗り込んだ。

ブロッツ・・・

男がドアを閉めた。たん車は動き出した。

今日は海へ行くのだ。

まあ、たくにい拓兄とあやねえ絢姉と私だけだけどね・・・。

「ひな雛 新しい浮き輪買ったからな」

私の世話をしてくれるたくにい拓兄はニッコリと笑いながら顔を後に向ける。

私実はカナヅチなんだよねえ・・・。

「ひな雛。今日は海でカツコイイ男見つけたよッ！」

少し男っぽいあやねえ絢姉はガッツポーズをしながら白い歯を見せる。

2人とも私の心配しすぎだし・・・。

「わ、分かってるよ！二人とも私のことよりも自分の心配して？ね

「？」

毎回のことながらも苦笑いの私。

2人はシュン・・・としながら前を向く。

拓兄にいさんは海に入ると自分が自分じゃなくなってナンパしまくったり、海を泳ぎまくったりするし、絢姉あやねえは自分には全然彼氏を捕まえる気配ないのに私のことばっかだし。

心配してくれるのは嬉しいんだけど自分のことを考えろっての！

約20分で海に行く為の駐車場に到着。

私達は車から降りる。

「わぁー！海きれい」

私は駐車場から見える海を眺める。

「あんまはしゃぐなよ！」

拓兄たくにいが頭をポンツと叩く。

「わかってますよ」

私はほっぺをプウツと膨らませる。

そのほっぺを^{あやねえ}絢姉が突付き、ケラケラと笑う。

^{たぐにい}拓兄は私の浮き輪と自分の荷物と私の荷物、^{あやねえ}絢姉は自分の荷物を持つ。
つ。

私は^{たぐにい}拓兄が荷物を持ってくれたので手ぶら。

2人ともあたしのためだと思ってくれてるんだよねえ。

「^{たぐにい}ありがとう
拓兄」

私はニツコリ。

満面の笑みをする。

ひそかに癒しオーラを出す。

「^{ひな}雛は可愛いなあ　さ。行こっか!」

^{たぐにい}拓兄は私の手をギュツと握って引っ張る。

「あゝん!置いてくくなあッ!!!!!!!」

あやねえ
絢姉は困った顔をしながら私達を追い駆けて来る。

私たちは浜に着いた。

洞窟内での出会い（前書き）

登場人物

あさがたひな

朝方雛

すぎもとひかる

杉本晃

『拓巳・絢紗』

洞窟内での出会い

「海だ。海だあ」

私はおおはしゃぎ。

「たぐにい拓兄！あやねえ絢姉！ちよつと遊んで来る！！」

「「え?!」」

2人は思わず声を合わせる。

へ？

なぜ合わせるの？

ただ遊びに行くだけなのに・・・??

「迷子になるなよ!」

「男に襲われるんじゃないよ!」

2人は私の目をギンツと睨む。

「はいはい・・・」

私は実際飽きれていた。

いつものことだけど飽きれてしまう。

心配しすぎだっつーの・・・。

私はその場にいたくなくて全速力でその場から離れた。

私は岩のあるところへと着いた。

「あれえ？ココどこだろ？」

私は初めてこの海に来たので興味津々。

いろんな所を覗く。

岩の奥や海の中。洞窟まであった。

私はその洞窟に興味を持ち、入って行く。

洞窟の中は予想どおり真っ暗。

水のしずくがポチャンツと落ちる音が洞窟内に響く。

奥まで行くと

ガッ

何かに引っかかり転んでしまった。

「痛つたあゝ・・・」

打った所をこすりながら立ち上がる。

後を見ると何かある。

え・・・？

まゝ、まさか死体？！

「痛つてえなあー・・・」

ありや？

男の人の声？？

この人生きてるし。

でも暗くてよく見えない。

「あれ・・・？あんた誰？」

よく見えないが男の人はこつちを見ているようだ。

「これじゃ見えねーよな」

そう言うとき男の人はカチツカチツと何かを鳴らす。

その音が聞こえなくなるとボツと明るくなった。

男の人がライターに火をつけたようだ。

「女・・・？」

男の人は眠い目をこすりながらこつちを見る。

「あな・・・たは？」

「俺は杉本晃。すぎもと ひかる おめーは？」

「私は朝方雛。あさがた ひな」

よかった・・・。

まともに話せそうな人だ。

秘密の場所（前書き）

（登場人物）
あさがたひな
朝方雛。
すぎもとひかる
杉本晃。

秘密の場所

「なんでココにいるの？」

私は普通に問い掛ける。

「寝てた」

ね・・・、寝てた・・・？！

こんな真っ暗なところで？！

すごいなあ

「ココ・・・俺の秘密の場所なんだ」

「え？」

秘密の場所・・・？

「俺が初めてこの海に来たときに見つけたんだ。だから俺の秘密の場所」

「ご・・・ごめんなさいッ！」

私は頭を下げる。

「え？！なんで謝んだよ？」

「だって・・・、^{ひかる}晃君の秘密の場所なのに勝手に上がり込んだじゃっ

て・・・」

私は怒られると思い、ギョッと目を閉じる。

「そんなの別に気にしてねーよ」

「・・・え？」

私は閉じていた目を開き、晃君ひかるの顔を見る。

「それにお前だったら別にいいし」

晃君ひかるは顔を赤くした。

・・・晃君ひかるって優しいんだあ。

「ありがとう」

私はまた満面の笑み。

癒しオーラもまた出す。

「おう」

晃君^{ひかる}は耳までも赤くしていた。

可愛い・・・

「えっとさ・・・。お前^{ひな}なんて呼ばないでよ・・・。」
「あーわりい。じゃあ、雛^{ひな}か？」

・・・雛^{ひな}・・・

私の胸がトクンツと脈打つ。

「うん！」

私は嬉しかった。

なんでかは分からないけど、拓兄^{たくにい}に呼ばれるよりも嬉しかった。
なんでだろ・・・？

外を見ると、もう夕日が沈みかけていた。

「やばっ！もう帰らなきゃ」

きつと2人とも心配してるよ……。

「そっか」

一瞬^{ひかる}だけど、晃君が寂しい顔をしたのを私は見逃さなかった。

「……またどこかで会えるよ！ってか、会おー！」

私はニツコリと笑う。

「……だな」

私はその言葉を聞き遂げると手を振りながら洞窟を後にした。

また……会えるよね？

なんと・・・！（前書き）

（登場人物）

あさがたひな
朝方雛。

ひつじ・加絵。かえ

『杉本晃・担任の先生』

なんと・・・！

ボッ

私は昨日、晃君^{ひかる}に会ってから頭が真っ白。

何も考える事が出来ない。

・・・なんでだー？

「雛^{ひな}。今日は学校でしょ？」

「へ・・・？」

私は一瞬固まる。

「ああああ！忘れてたあ！！！！！！！」

私は今日が学校ということを思い出し、叫んだ。

どうしょ、どうしょ！

すっかり忘れてたよお！

私はドタバタ。

家中を走り回る。

「雛^{ひな}ちゃん！ご飯よ」

ひつじの加絵^{かえ}さんが急いでる私を呼び止める。

「そんな暇ねーんですよッ！」

私はイラついてるせいで顔を怖くしてしまった。

「ひいっ」

加絵^{かえ}さんは顔が真っ青になった。

まあ・・・よくあることなんだけどね。

私は制服に着替え、かばんを持ち、外に出た。

「お嬢！」

1人の男が車を私の前に止め、窓から声をかける。

私は遅刻したくないので嫌々車に乗り込んだ。

5分も経つと学校に着いた。

私は近くに止めてもらい、そこで降りた。

「ありがとう」

私は軽く挨拶すると全速力で走る。

ギリギリセーフで教室のドアを開けた。

「おはよう!」

私は息切れしながらもいつもかかさずしている挨拶をする。

「「おはよ」

みんながいつも答えてくれる。

・・・すっごく嬉しい

「ほら！席につけー！！」

先生の掛け声と共にみんなが自分の席に座る。

先生はよしよしとうなずく。

「今日は珍しく転入生だ」

みんなは先生のこの言葉を聞き、ワァッと叫ぶ。

ガラッ

教室のドアが開く。

入って来たのは・・・

なんと！^{ひかる}晃君だった。

転校理由（前書き）

（登場人物）
あさがたひな
朝方雛。
すぎもとひかる
杉本晃。

転校理由

晃君^{ひかる}が・・・なんで?!

「杉本晃^{すぎもとひかる}です。よろしくっス」

晃君^{ひかる}は軽く挨拶。

女子のみんながキャーッと叫ぶ。

・・・だって晃君^{ひかる}、カッコイイもん

バチッ

一瞬、晃君^{ひかる}と視線がぶつかる。

晃君^{ひかる}は視線がぶつかった瞬間、ウィンクしてくれた。

ドキンッ

私の胸が高鳴る。

・・・やっぱり。

やっぱりまた会えた

昼休み、晃君ひかるの席を見たけど、そこには晃君ひかるの姿はなかった。

・・・あれ？

どこ行ったんだろ？？

私は晃君ひかるを探しに教室を出た。

保健室や体育館を見たけど何処にもいない。

最後に中庭を見てみることにした。

すると、中庭の一番目立たない芝生の生えているところに晃君ひかるが寝ていた。

「晃君！」
ひかる

私は思わず呼んでしまった。

「ん？」

晃君ひかるは私の声に気づき、起き上がる。

「どした？ 雛」
ひな

・・・
雛。

ついつい顔を赤らめてしまう。

「ココにいたんだ」

「誰にも見つかりたくなかったんだ」

「あ。お前には別に見つかってもいいんだけどな」

晃君ひかるはニツと笑う。

「ありがと・・・」

私は小さな声でボソツと言う。

「あ？なんて？？」

「なんもないよーだ」

私はからかうかのように舌をベーツと出す。

「・・・どうしてこの学校に転校してきたの？」

私はずっと聞きたかったことを口に出す。

晃君^{ひかる}は何秒か黙り込む。

「・・・彼女のいる学校がココは近いんだ」

「え？」

かの・・・じょ？？

嘘・・・。

思わず目から涙が溢れてしまう。

「彼女・・・いるんだ？」

私の声、思わず震えてる。

これじゃ泣いてるのバレちゃう。

「・・・ああ」

「ゴメン。・・・戻る」

私は教室に向かって走った。

「^{ひな}雛！？」

晃君の呼び止めも聞かずに・・・。

涙の訳（前書き）

（登場人物）
あさがたひな
朝方雛。
すぎもとひかる
杉本晃。

涙の訳

私は泣いている顔を見つかりたくなくて下を向きながら教室に入り、自分の席に座る。

座った瞬間私はうつむき、声を殺して泣いた。

・・・^{ひかる}晃君に・・・彼女がいたなんて・・・。

^{ひかる}晃君カッコイイもん。モテるに決まってる。

その中の女子を選んだんだ。

きつと・・・私よりも美人だ。

無理だよ・・・。勝ち目なんかない。

私はそんなことを考えていると、余計に涙が出てくる。

・・・やだよ。

なんで彼女なんているのよッ!!

やだ・・・やだよお。

涙がいっぱい溢れてくる。

・ ・ 止らないよお。

「 ・ ・ ・ 雛^{ひな}」

聞き覚えのある声。

これは ・ ・ ・ 晃君^{ひかる}の声だ。

「 ・ ・ ・ 」

私は泣きやみ、黙り込む。

「ちょっと来い」

そう言うと晃君^{ひかる}は無理やり私の腕を引っ張る。

見ると、さっきの中庭に着いていた。

「なんで泣いてるんだ？」

晃君^{ひかる}は泣いてる私に優しく問い掛ける。

「どうして言わなきゃなんないんだよ」
「え？」

つついやくザの時の声が出てしまう。

「ど．．．どうして言わないといけないの？」

私は言い直した。

「気になるし。俺の．．．せいかもしれないから．．．」

晃君^{ひかる}も下を向く。

．．．ホント、優すぎるよ。

「晃君^{ひかる}に．．．彼女いるなんて知らなかった．．．」

私はつつむきながらボソツと言った。

「・・・」

晃君^{ひかる}は黙り込んでしまった。

・・・どうして黙るの？

聞いてきたのはそっちじゃない・・・。

「まあ・・・！誰にでも秘密はあるよね」

私は無理して笑顔を作る。

だって元気にしなきゃ、晃君^{ひかる}困っちゃうもんね。

「わりい・・・」

「別にさあ！晃君^{ひかる}のせいじゃないしー」

私は横を向きながら顔を赤らめる。

「・・・彼女ってどんな人？」

私はズーっと聞きたかったことを口に出す。

「美人だよ」

「・・・それだけ?!」

「ああ」

はあ？

意味わかんない・・・。

全然見てねーんじゃねーの?!

「でも・・・、ひな雛の方が美人だよ」

「・・・へ?」

私は一瞬固まる。

どんどん顔を赤らめる。

「えええええ?!」

私は顔を真っ赤っ赤にし、思わず叫んでしまう。

「うっ、っ、嘘でしょ?!?!」

「嘘じゃねーよ?」

「いっ、っ、意味分かんない! 普通は彼女の方を言うでしょ?!」

「だってホントのことだし」

ホントのことって……。

彼女より私って……。

嬉しいけど、おかしいよ。

「じゃあ俺帰るわ」

そう言っひかるて晃君は教室へ戻ってしまった。

私は顔の色が元に戻らない。

真っ赤のまま。

変な人。

ホント変な人。

でも・・・そんなところが好きなんだよね。

共通点（前書き）

（登場人物）
あさがたひな
朝方雛。
はやせらいと
早瀬雷斗。

共通点

私はとぼとぼと廊下を歩く。

変な晃君。
ひかる

どうして彼女より私のほうが・・・？

おかしいよ。

私はこんなことを考えているせいで前にいる人に気づかず、

ドンッ

ぶつかってしまった。

私はぶつかった衝撃でしりもちをつく。

「いたたあ・・・」

当たった所をさする。

「大丈夫？」

ぶつかった相手は優しく手を差し伸べてくれた。

「はい」

私はその手を取り、立ち上がる。

よく見るとその人は同級生の早瀬雷斗君はやせのらんとだった。

「ゴメンね。ちょっと考え事してて……」
「別にいいよ」

早瀬君はやせはニコツと笑う。

優しい笑顔だった。

ちょっと……晃君ひかるの笑顔に似てるような……。

……気のせいだよな。

「あのさ。確か・・・朝方あさがただよな？」

「うん？」

「そっか。じゃあね」

そう言つて早瀬はやせ君はどこかへ行つてしまった。

・・・早瀬はやせ君も変な人。

そこも晃ひかる君に似てる。

共通点多いなあ。

・・・ま。いつか！

私は悩んでいることを忘れ、教室へ入った。

そこには

また晃ひかる君の姿は無かった。

また中庭に言つたのかなあ？？

行こつかなあ・・・。

でも、、なんだか行きにくいしなあ・・・。

ガラッ

教室のドアが突然開く。

サボリ（前書き）

（登場人物）

あさがたひな
朝方雛。

担任の先生。

クラスの子 多数

サボリ

「誰か杉本知らんか?!」

ドアを開けたのは先生だった。

息切れしている先生にみんなが視線を向ける。

「杉本君がどーしたんですかあ?」

クラスの1人の女子が先生に問い掛ける。

私もそれを聞きたかった。

「用事があるんだがどこにもいないんだ」

・・・え?!

クラス全員がザワザワ。

いな・・・い?

「ちゃんと探したんですか?!」

クラスみんなが言う。

私もそれ思った!

「ああ……。でもどこにもいないんだ……」

先生は下を向く。

どうして……?

どうしていないの?!

おかしいじゃん。学校を出ないかぎり絶対にいるは……。

かぎり……?

そうだ!!

「学校出てないの?!」

私は叫んだ。

「そうだぜ！絶対出てるんじゃないの？！」

みんなも同意してくれた。

みんなはいっせいに教室を飛び出す。

向かった先は下駄箱！

やっぱり・・・。

晃君ひかりの下駄箱の中には靴が無かった。

さぼったんだ・・・。

転校そうそうにサボりかよ。

やっぱり変！

私だっただけーったいサボらないけどなあー・・・。

私はその後の授業の内容が耳に入らなかった。

理由は晃君^{ひかる}が気になるから。

ただそれだけ・・・。

こんなに晃君^{ひかる}しか考えられないなんて・・・。

私どうしちゃったんだろ・・・。

初めて見た晃の・・・（前書き）

（登場人物）

あさがたひな

朝方雛。

はやせらいと

早瀬雷斗。

『杉本晃・晃の彼女』

初めて見た晃の・・・

今日一日の授業が終わった。

放課後、家に帰ろうと思っていたけど、帰ってもやることがないのでどこか寄って行こうとアクセサリー屋に向かった。

「あれー？朝方あさがたじゃん」

誰かが私の名前を呼ぶ。

私は声が聞こえる方を向くとそこには早瀬はやせ君がいた。

「早瀬はやせ君！」

私は早瀬はやせ君の元へ駆け寄る。

「どうしてココに？」

「暇だから来たんだ」

「あ。私もだよ！」

「じゃあ一緒に遊ぶか？」

「へ？」

それって“デート”ってこと？

「ダメか？」

「え？！う・・・ううん！別にいいよ」

私は思わず動揺。

だって・・・初めての男の人とのデートだもん！

緊張だよお。

その後、色々歩き回った。

「どこ行きたい？」

早瀬^{はやせ}君は優しく問い掛ける。

「うーん・・・。別に希望はないなあ」

「じゃあプレゼント買ってやるよ」

「え？！いいの？」

「ああ」

ニコッ。

早瀬君の優しい笑顔。

早瀬君は全部が優しいな。

私は早瀬君に引っ張られて女性向けの店へと連れて行かれる。

「これはどう?」

そう言いながら早瀬君は胸元がパツカリと開いたワンピースを差し出す。

「……………こんなの恥ずかしいよ!」

私は顔を真っ赤にしながらワンピースを元の場所に戻す。

その後、何分ぐらい店の中を歩き回っただろ……?

そう思うようになってきた。

「お。これ可愛いじゃん！」

早瀬君^{はやせ}が差し出してきたのは真っ白いブーツ。

雪のような感じでふわふわのブーツ。

私も可愛いと思った。

「うん 可愛い！」

「じゃあ買ってやるよ」

「・・・え?!」

早瀬君^{はやせ}は無言でレジへ行き、9000円ぐらいのブーツを買ってくれた。

「はい」

ニッコリ笑いながらブーツの入った袋を差し出す早瀬君^{はやせ}。

私はその袋を受け取る。

「あ……ありがとね」

「いいよ。じゃあ帰るか」

早瀬^{はやせ}君はクルッと出口の方を向く。

私も向いたその時、

晃^{ひかる}君がいた。

なんでいるの?!

ココ女性向けの店だよ?!

よく見ると、^{ひかる}晃君の横には女性が立っていた。

だ・・・れ？

まさか彼女？

その女性は美人だった。

^{ひかる}晃君とお似合いだった。

その人がうらやましい・・・。

私はいつの間にか目に涙が溜まっていた。

「朝方？！なんで泣いてんだ？！」
あさがた
「ゴメン・・・。帰る」

そう言って走った。

そこに居たくなかったから。

幸せそうな2人を見たくなかったから・・・。

溢れる涙（前書き）

（登場人物）

あさがたひな
朝方雛。

ひつじ・加絵。
かえ。

溢れる涙

ヒック・・・。
グスン・・・。

私は家に帰るなり、自分の部屋に入った。

そしてベッドにうずくまり、今泣いている。

・・・あの人美人だったな・・・。

いいな。

私もひかる晃君とお似合いの女になりたいよ・・・。

「雛ひなちゃん」

ひつじの加絵かえさんが静かに部屋に入ってくる。

私は目を拭い、加絵かえさんの方を向く。

「どうしたんですか？」

私は無理して笑顔を作る。

そんな私を見た加絵さんは、険しい顔をする。

「なんで泣いてたの？」

私は黙り込む。

「おしえて？」

加絵さんはまた泣きそうな私に、優しく問い掛ける。

「・・・好きな人の彼女見たんです」

私は下を向きながらボソツと言った。

「そっか……。ほんとに彼女なの？」

「だって・・・本人に聞いたんですから・・・」

「彼女の名前とか顔知ってるの？」

「知りません」

「じゃあ違つかもしれないじゃない！」

加絵さんの顔はパアツと明るくなった。

「頑張つて」

加絵^{かえ}さんは私の肩をポンツと叩き、部屋から出て行った。

頑張れつて・・・。

何を頑張るのよ・・・。

彼女に決まってる・・・。

だって、2人とも幸せそうな顔してたんだもん・・・。

頬を伝う一粒の涙。

あ。また涙出てきちゃった。

バカな私。

泣き虫なんだから・・・。

元気付けてもダメだった。

涙が止らない。

どうしても不意に涙が出てくる。

・・・どうして？

どうしてこんなに悲しいの??

ただ・・・^{ひかる}晃君に彼女がいたっただけなのに・・・。

私はバカだな。

ホントバカ・・・。

涙が溢れる。

床が濡れちゃうくらい溢れる。

・・・止らない。

本当のことを知らなきゃ止らないよ・・・。

私はムクツと立ち上がり、部屋を出て、家を飛び出した。

向かった先は・・・

ひかる
晃君の家。

2人は兄弟（前書き）

（登場人物）

あさがたひな

朝方雛。

すぎもとひかる

杉本晃。

はやせらいと

早瀬雷斗。

2人は兄弟

ピンポン

私は息切れしながら^{ひかる}晃君家のチャイムを押す。

私はここに来る前、真実を知るために溢れる涙を流しながら走って来たのだ。

ガチャッ

扉が開く。

「はい？」

なんと出てきたのは^{はやせ}早瀬君だった。

「は……^{はやせ}早瀬君?!」

私は口をパクパクさせながら早瀬君^{はやせ}を指差す。

「朝方……。はい」

早瀬君^{はやせ}はいつぺんとまどつたが、満面の笑みで挨拶。

「な……なんているの?!」

「それは俺が教えてやるよ」

この声……。

晃君^{ひかる}だ。

晃君^{ひかる}はよっという感じで出てきた。

「ひか……る君……」
「久しぶりだな。雛^{ひな}」

晃君^{ひかる}はニコツと笑う。

でも私の視線を下に向ける。

「俺と雷斗^{らいと}は兄弟なんだ」

「・・・へ？」

兄・・・弟？

「え？！名字違っじゃん！！」

「だって親違っし」

「え？」

親が・・・違っ？

どういう事？

「俺達のおふくろは、浮気したんだ。ンで、おふくろと親父は離婚して、それぞれ再婚したんだ。俺はおふくろ、雷斗らいとは親父の所へ引き取られたんだ」

「そう・・・だったんだ」

そんなの最低だよ。

2人の親は何考えてんのよ・・・。

頭おかしいんじゃないの・・・？

・・・って！

こんなこと聞きたいんじゃないっつーのッ！！！！！！

真実（前書き）

（登場人物）

あさがたひな

朝方雛。

すぎもとひかる

杉本晃。

はやせらいと

早瀬雷斗。

真実

「ってか、こんな事聞きに来たのか？」

晃君^{ひかる}は普通のことみたいに聞く。

「え。あ・・・違う！」

「何？」

聞いていいのかな・・・？

ってゆーか、いざ聞く ってなったら緊張するんですけど！

「・・・えっと」

思わず動揺。

「えっとじゃ分かんねーよ？」

「昨日のあの女の人誰なの？！」

「いっ・・・ちゃった。」

私は下を向く。

「なんで知ってんの？」

「昨日、早瀬君はやせといったら偶然見ちゃって・・・」

「雷斗らいと・・・と?!」

晃君ひかるはクルツと早瀬君はやせを見る。

キツと睨にらんでるようだった。

「なんで睨にらむんだよ。どーせお前まへだって有美佳ちゃんゆみかといたんだろ？」

有美佳ゆみか・・・？

誰それ・・・？

まさか彼女の名前？

晃君ひかるはクルツとこっちを向く。

「お前だつて雷斗らいとといたんだろ？俺だつて誰といたつていーだろ？」

なに・・・それ・・・

だんだん怒りが込み上げてくる。

「早瀬君はやせ関係ないじゃん！」

「・・・つかさ、なんで言わなきゃなんない訳？」

・・・そんなに言いたくないの・・・？

そう言いたい。

でもきつと喧嘩になっちゃう。

「じゃあ・・・どうして言ってくれないの？」

私はおそろおそろひかめ晃君の顔を見る。

「言いたくねーから」

即答する晃君。^{ひかる}

「・・・どうして言ってくれないの？」

そうだよ。

いつも何も言ってくれない。

晃君^{ひかる}の事聞いたのは洞窟のことぐらいだ。

ひどいよね。

彼女いるからって・・・。

「彼女」

「え？」

「彼女といた」

「・・・」

思わず黙り込む私。

「言っただけど？」

・・・やっぱりね。

そうだと思った。

「・・・彼女美人だね」

「ああ」

「お幸せに」

そう言いながら私は手を振り、2人と別れた。

そう・・・だね。

私より彼女優先だね・・・。

涙が込み上げてくるのをこらえる私。

これぐらいでバカみたい。

「朝方！^{あさがた}」

後から私を呼ぶ声が聞こえる。

振り向くと早瀬君^{はやせ}が私を追い駆けて来ていた。

「早瀬君^{はやせ}・・・？」

「お前・・・^{ひかる}晃のこと好きなのか・・・？」

かああっ

思わず顔を赤らめる。

でも正直に私はうなずく。

「・・・俺じゃ、アイツのかわりのならねーか？」

「・・・へ？」

告白（前書き）

（登場人物）
あさがたひな
朝方雛。
はやせらいと
早瀬雷斗。

告白

・・・え?!

かわ・・・り?

私は思わず硬直。

「ハハッ。急でビビったよな。わりいわりい」

早瀬^{はやせ}君は普通に笑ってる。

・・・あんなこと言ったのに。

「別に・・・」

私がボケッとしてると、不意に早瀬^{はやせ}君が近づいてきた。

「また考えと言って」

ボソッと耳元でささやかれ、思わずビクッとしてしまう。

そんな私を見た早瀬^{はやせ}君はクスッと笑い、来た道に戻って行った。

・・・何あれ・・・！

バカにしてるしっ！！

ムカツク。

でも優しいんだよね。

・・・今まで一緒にいたのに気づかなかった・・・。

私って鈍感・・・？

私は行こうとした道を歩き出す。

でも・・・返事って言われてもなあ・・・。

早瀬^{はやせ}君は私の事好きで、私は晃^{ひかる}君の事好きで、晃^{ひかる}君は彼女の事が好きで・・・。

なんか微妙な関係だなあ。

でも・・・このまま晃君ひかるの事好きでも意味が無いと思うし・・・。

どおせ晃君ひかるは私のことなんか興味無いだろうし・・・。

このまま悲しい思いするよりは・・・いいと思う。

でも・・・すぐに諦めろと言われても無理だし。

うわぁーん。

悩むよぉ!!

私は思わず頭を抱える。

ピンツと頭のどこかでひらめいた。

もう・・・これでいいや!

よし！決めた。

嘘の気持ち（前書き）

（登場人物）
あさがたひな
朝方雛。
はやせらいと
早瀬雷斗。

嘘の気持ち

次の日、
ただいま学校でございます。

今日一日、晃君^{ひかる}と話してない。
ちよつとショック・・・。

私はトイレに行きたくなり、向かおうとした時、目の前に早瀬君^{はやせ}が通った。

「早瀬君^{はやせ}!!」

私は思わず呼び止める。

「朝方^{あさがた}・・・？」

私の声を聞いて振り向く早瀬君^{はやせ}。

「ちよつと来て！」

私は早瀬君^{はやせ}の腕を引っ張り、屋上へ連れて行く。

その姿を誰かが見ていたのを知りもしなかった。

「――屋上――」

「どーしたんだよ？」

早瀬君は訳もわからず連れてこられたので頭上にはてなマーク。

「……昨日の返事」

私はボソツと顔を赤らめながら言う。

その言葉を早瀬君は聞き逃さなかった。

「うん」

もう……言ってもいいよね。

「私……早瀬君と付き合いたい」

「・・・え?!」

言っちゃった・・・。

言っちゃったよひかる晃君。

もうこれでひかる晃君への恋は終わりだね。

忘れよう。

これをきっかけに・・・。

「マジ?!」

「うん」

「マジでー?! やったあ!」

思わず頭より上に腕を上げる早瀬はやせ君。

そんなに嬉しいんだ・・・。

もしかして私悪い事しちゃった?

それから早瀬君とお付き合^{はやせ}いすることになった。

チョコレート（前書き）

（登場人物）

あさがたひな

朝方雛。

はやせらいと

早瀬雷斗。

『女性』

チョコレート

それからは早瀬君のことを《雷斗》と呼ぶようになった。

「雷斗」

「ソー？」

私は学校の帰り、いつもどおり雷斗と帰っている。

私は雷斗の顔を見る。

「バレンタインチョコいる？」

「はあ？あ・た・り・ま・え・だ・ろッ！……！」

そう言いながら私の額にデコピンする。

私は痛くて額を手であおふ。

デコピンされた額がジンジン痛む。

「で？くれんの？」

ズイツと顔を近づけてくる雷斗の顔。

私は思わずドキッとしてしまう。

「あ……あげるよ！当たり前だよね。あははっ」

私は照れ笑い。

そんな姿を見て雷斗らいとはクスクス笑う。

「ありがとう」

雷斗らいとは私の前髪をかきわけ、額に軽くキスをした。

痛かった額が、今度は熱く火照る。

バレンタインデーは明後日。

それまでに完成させなきゃ！！

私は雷斗らいとと別れるなり私服に着替え、財布を持ち、家を飛び出す。

私服と言っても普通の白いシャツの上に灰色のパーカーをはおい、ジーパンにショートブーツ。

普通の私服だ。

私が向かった先はc o o p。

そうcoopには今、バレンタインデーのため、チョコなどのバレンタインデーに使う器具等売っている。

私は友達と雷斗、あとは・・・。

・・・晃君ひかる・・・。

頭の隅にこの名前がよぎった。

な・・・なんであの人に渡さなきゃなんないのよッ！

思わず顔を赤らめる。

この気持ちを忘れる為に雷斗らいとと付き合っただのに意味無いじゃない・・・。

・・・でも・・・

結構・・・晃君ひかるには世話になったしな・・・。

義理チョコで渡せばいいんだ！

頭良い

私は晃君ひかるの分のチョコをカゴに入れる。

その他、器具などもカゴに入れ、レジでお金を払った。

よし！

全部買ったし。家帰ってチョコ作りの練習しますかあ！！！！！！

そう思い、ルンルン気分で出口に出ようとした時、

「朝方あさがた……雛ひな……さん？」

女性の声が背後から聞こえた。

振り向くと見覚えのある人が・・・。

彼女との再会（前書き）

（登場人物）

あさがたひな

朝方雛。

ささもみゆみが

佐々紅有美佳。

彼女との再会

「あな・・・たは？」

私は出口前で立ち尽くす。

だって・・・だってこの人は、らいと雷斗にブーツ買ってもらったときに
ひかる晃君といた彼女なんだもん！

「まあココで話すのもなんだから喫茶店でも行きましょ？」

ひかる晃君の彼女さんは喫茶店へ向かい、スタスタと歩いて行く。

その人をトボトボとついていく私。

・・・何言われるんだろ？

くカランコロン

喫茶店に入るとドアにつけてあった鐘が鳴った。

店員さんに誘導され、窓側の席に向かい合い座る。

「ご注文はありますか？」

店員さんが笑顔でオーダーしてくれる。

「イヤ。いいです」

彼女さんは即答。

店員さんは・・・そうですか　という感じで違うテーブルへ向かった。

「急にごめんなさいね」

「いえ！大丈夫です」

私は緊張気味のせいで張りきってしまっ

そんな私を見た彼女さんはクスッと笑う。

「私は佐々紅有美佳。^{ささもみゆみか}いちお晃^{ひかる}の彼女よ」

ズキッ・・・

この言葉を聞いた瞬間胸が痛んだ。

・・・やっぱり。

晃君ひかると雷斗らいとが言ってた

有美佳ゆみか

って名前・・・。

彼女の名前だったんだ。

「あ・・・初めまして！朝方あさがた雛ひなです」
「ええ。知ってるわ」

・・・え？！

私のこと知ってる・・・？

「あのお・・・？なんで私のこと・・・？？」
「晃ひかるに聞いたのよ」

ひか・・・る君に・・・？

何言っただっていうの？！

私は思わずうつむいてしまう。

「晃ひかるがね、転入した時あなたのことばかり言ってたわ・・・。その時すごく嫉妬した。だって知らない女の話ばかりするんだもん。

少し・・・悲しかったわ」

私のこと・・・？

「何・・・言ってたんですか？」

私は有美佳^{ゆみか}さんの顔を見る。

「笑顔が可愛いとか、明るい子とか、いつも俺のそばにいる
・
・
とかよ」

思わず顔を赤らめる。

・・・可愛い。

そんなこと言ってくれるなんて・・・。

嬉しい！

「あなた・・・何様のつもり・・・?!」
「へ？」

有美佳^{ゆみか}さんは私をキッと睨みながら見下す。

「あの人には私っていう彼女がいるのよ?!なのに今話聞いたら顔

赤くしちゃって・・・！あの人のこと好きなの？！好きなら私あな
たの事恨むわよ！」

・・・ッ。

私は・・・晃君ひかるのことが好き・・・。

でも・・・

今、雷斗らいとという彼氏がいる。

私は・・・どっちが好きなの・・・??

「ねえ！どうなのよ！！」

有美佳ゆみかさんは下を向いてる私にイライラしているようだ。

「私は・・・」

ボソツと口に出す。

私の気持ちは・・・！

本当の気持ち（前書き）

（登場人物）

あさがたひな

朝方雛。

ささもみゆみが

佐々紅有美佳。

すぎもとひかる

杉本晃。

はやせらいと

早瀬雷斗。

本当の気持ち

私はニツと有美佳さんの顔を見上げる。

「私は晃君ひかるのこと好きですよ！」

そう・・・これが本当の気持ち。

付き合ってる彼氏よりも大好きな人。

・・・晃君ひかる。

いつもあなたばかり考えてる。

頭の中はあなたのことばかり。

誰といたか教えてくれなかった時、私の心は泣いていた。

晃君ひかるのこと、いっぱい知りたかったから。

でも・・・彼女がいるって聞いた時は涙が溢れるくらいショックだったよ。

だって・・・

あなたが大好きだから。

「・・・ッ!!」

ゆみか有美佳さんは舌打ちして私をすごい顔で睨みつけて喫茶店を出て行った。

・・・これで、いいんだよね。

あ！

チョコレート!!

私は練習しなきゃいけないことを思い出し、喫茶店を飛び出した。

ひかる晃君!!

私、らいと雷斗よりもおいしく作るからねッ!!

――次の日――

私はこの日学校。

靴を入れる為に下駄箱に立った時、背後に気配を感じた。

・・・^{ひかる}晃君だつた。

「おはよ」

私は^{ひかる}晃君の顔を不安そうに見る。

・・・話してくれるかな??

^{ひかる}晃君はチラッとこっちを見て、

「・・・はよ」

と挨拶してくれた。

私の顔はパアアッと明るくなった。

嬉しいな

「^{ひな}雛！おはよ」

この声は・・・

・・・雷斗^{らいと}だ！

「お・・・はよ」

「よお雷斗^{らいと}」

「おー晃^{ひかる}」

2人の何気ない挨拶。

なんか変な空気・・・。

「じゃあな」

晃君^{ひかる}は私の耳元でそうささやき、先に教室へと歩いていった。

私は晃君^{ひかる}の吐息が耳元にかかり、ビクッと反応してしまう。

晃君^{ひかる}の吐息がかかった耳元が赤く染まり、熱くなる。

「雛^{ひな}。何話してたの？」

「え？おはよ って・・・」

私の顔はキョトンツとしてる。

「・・・そう」

ホッと肩を撫で下ろす雷斗^{らいと}。

心配してたのかな・・・??

――昼休み――

私は暇だったので雷斗らいとのいる教室へむかった。

雷斗らいとはB組で私はD組。

クラスが別なのだ。

「らい・・・早瀬君はやせいますかあ??」

私はクラスの入り口に体を乗り出す。

「あれー?さついまでいたんだけどなあ・・・」

クラスの1人の女子が答えてくれた。

・・・いないのかあ・・・。

私はその女子に ありがとう と言ってクラスから離れた。

私はまたあの芝生へ向かった。

告白（前書き）

（登場人物）
あさがたひな
朝方雛。
ひかる
杉本晃。

告白

「あー！やっぱり」

私が声をかけたのは芝生で寝転んでいる晃君だ。

「なんだよ雛。雷斗のどこいかねーのか？」
「・・・え？」

「俺・・・知ってた。お前と雷斗が付き合ってること・・・」
「な・・・んで？」
「見ちゃったんだ・・・。よかつたな両想いで」

嘘・・・！

両思いじゃないよ・・・！

私が好きなのは晃君なんだよッ！！

「ちがうッ！！」

私は思わず叫んでしまった。

「え？」

キョトンッとする晃君の顔。

・・・ハッ

口に手を当てる私。

どう・・・しよう。

なんて言えればいいか・・・。

「りよ・・・両思いじゃないよッ!」

「じゃあなんで付き合ってるんだよ?」

「そ・・・れは」

私の視線はだんだん下へと向いていく。

「好きな人がいるけどその人との恋は叶わないからその人への恋を
忘れるためよ・・・」

「ふん・・・」

あっさりとした返事。

ちよっと寂しい気も・・・。

「・・・誰か分かってるの？」

「知らん」

「・・・^{ひかる}晃君だよ？」

「え?!」

・・・言ってしまった・・・。

告白みたいだ。

「私は^{ひかる}晃君が好きなの」

「・・・でも俺・・・」

「有^{ゆみか}美佳さんがいるもんね。わかってる」

「わるいな・・・」

「いいよ!」

これでいい。

本当の気持ち伝えられたからいいの・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4757d/>

あなたが一番好きなの！！

2011年1月20日04時08分発行